
大型犬のユウウツ

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大型犬のユウウツ

【Nコード】

N2855C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

佐々木陽一に拾われた「オレ」は、陽一の奇妙なくせに気づいて

結婚の約束までしていた女に部屋を追い出されてしまったオレは、ふらふらしていたところを佐々木陽一に拾われた。

「行くところないんだったら、うち、来る？」

陽一は名乗ったそのすぐあと、オレを頭のとっぺんからつま先まで眺めたあと、そう言った。

なにもかもどうでもよさそうな陽一の顔を見て、ああ楽でいいかもしれない、という気になった。

実はオレが女に部屋を追い出されたのは、男癖の悪さが原因だった。

オレはバイなのだ。

女も捨てがたかったが、やはり男も捨てがたく、こっそり連れ込んでるのがバレて叩き出された。

そういうわけで今はどこにも行くところがない。

だったら、深くものごとを考えなさそうな、そういう適当なところに転がり込んで、こっそりやるのが一番いい。そう思った。

それになにより、陽一は意外とオレ好みの顔をしている。

女っぽい、というほどには弱々しくなく、けれども男くさいというわけでもない。女子高生なんかにきゃーきゃー騒がれそうな甘い顔立ちってのが、実はオレのストライクゾーンなのだ。

まあ、そういうわけで、オレは陽一と部屋をシェアする（と、いうか、居候する）ことになった。

拾われたからには、オレは飼い犬であっちが飼い主、というような関係になるのかと思いきや、どういうわけか欠陥だらけでオレの方が手間をかけられっぱなしだったりする。園児よりも犬の方が賢い子供向けアニメを思い出したりして、オレは「わたあめ！」とか叫んで丸まってやりたい気分になった。

それというのも、陽一にはヘンな癖があるのだった。

陽一は狭い所をこよなく愛する男なのだ。狭い所であればあるほどいいらしい。

今日、陽一がこもる場所として選んだのは、クローゼットの中だった。出かけようと思つてクローゼットを開けたら、中で陽一が体育すわりをして虚ろな目をしていたりしたから、オレはホラームービーのヒロインみたいに悲鳴を上げてしまった。

自分で自分の悲鳴にびっくりして尻もちをついて、深呼吸しながらクローゼットを見つめたが、陽一はオレの方を見もしない。

拾つておいてなんだよそれは、と腹が立つてくる。

オレは立ち上がって、陽一の肩をつかんだ。陽一はオレの手を払いのける。返事もせずに、虚ろな視線はそのままに。

「……なんなんだよ」

出かける予定は取りやめだ。一度や二度なら我慢もできるが、こちよくちよくとなつたら黙っていられない。

オレはその場に座り込んで、腕組みをして陽一を見つめた。

「お前な。飼い主は犬に対して責任があるつてのを知らんのか」

無駄なことを言ってみる。オレは犬じゃないし、だから陽一がオレに責任を持つ必要などないにもない。

「いいか、わかつてるのか、お前がずーっとそうしてたら、オレは生きてらんないんだぞ。オレの命握ってるんだぞわかつてるのか」

自分でもなにを言ってるのだからよくわからない。脅し文句にもなりやしない。

なにしろオレは今年で二十二歳になる。庇護を必要とする子供ではない。たかだかふたつ三つしか変わらないであろう相手に庇護されなかつたら死ぬというほど、ヤワな人間でなんかない。

ただ、オレは非常にムカついていた。

弟のことを思い出したのだ。

弟はオレと違ってとんでもなく飽きっぽい。

金魚やハムスターを飼いたいと騒ぐくせに、いつも途中で飽きて

放り出した。オレが気づけばよかったが、気づかなかつたらどれも全部すぐに死んだ。

あるとき、弟はこっそり犬を拾ってきた。

そうして、物置で飼いはじめたものの、すぐに犬のことは忘れてしまった。

気づいたときには当然手遅れだった。

痩せこけた犬の死骸を見つけたのはオレだ。蛆がわいたそれを埋めてやり、木切れで墓標を作ってやった。そうしてオレは弟をなじった。泣きながら怒った。

それに弟は、「死んだんだつたらまた新しいのを買えばいいのに」と答えたのだった。

弟は幼かった。まだ、あの頃、十にもなっていなかったと思う。でもオレには許せなかった。オレは十五にもなっていたのに、弟を殴りつけ、蹴り倒し、重症を負わせた。

以来、オレは隔離され、高校進学と同時に家を追い出された。大人たちにとって正常なのは弟で、たかが犬くらいのことで弟に大怪我をさせる兄は異常だったのだ。

陽一は、そんな弟を思わせた。オレを拾っておいて、そのままにしておく。それが許せない。

思い出すと鼻がつんとした。犬の死骸を埋めたときの、あの、毛皮におおわれたやわらかすぎる肉の感触がよみがえってきた。

そうしたら、もう止められなかった。

ハンカチを出す間もなかった。あふれた涙はズボンに落ちてしみを作った。

オレは目をしばしばさせながら、涙で歪んだ陽一を見つめた。

のろのろと視線をさまよわせていた陽一は、ふと、オレに目を留めると冬眠後の熊みたいのこっそりクローゼットから出てきた。

膝立ちにオレの前に座って、オレの頬に手を添える。

「……なんだよ」

「泣いてる」

「泣いてるよ。悪いかよ」

オレがヤケになって叫ぶと、陽一はゆっくり首を振った。

「俺がないのが、そんなに悲しいのか？」

おまえはここにいないじゃないか。

そう言おうとして、オレは言葉を飲み込んだ。

気づけば止まっていた涙を拭って、陽一を見つめる。

陽一の緑がかった黒瞳は、ただオレだけに向けられている。探ら
れているような気分になって、オレはわずかに目をそらした。

「悲しいよ」

「本当に？」

「本当だよ」

「……そうか」

陽一は立ち上がった。台所に足を向けつつ、

「なに食いたい？」

と言った。

「犬まんま」

「アホ。かつ丼でいいな」

オレが茶目っ気を發揮して言ったセリフは陽一には通じないみたい
だった。

でもまあ、こいつとはうまくやってけるかもしれない。そんな気が
した。

まあいいか、とオレはソファに横になった。でっかい犬はソファ
で昼寝するもんなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2855c/>

大型犬のユウウツ

2010年10月8日15時31分発行